
SHUFFLE ! ~if story~

八重桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H U F F L E ! ~ i f s t o r y ~

【Nコード】

N 6 7 9 6 P

【作者名】

八重桜

【あらすじ】

もしも、あの事故が起こっていなかったら？、もしも、桜がバーベナ学園に進学していたら？。

そんな、もしもがあったかもしれません。

この物語はそんなもしもの可能性の中に過ぎない、ある一つのラブストーリーです。

この作品は私の処女作のリメイク版（といってもずいぶん変わっているけど）です。

1話 転校生の噂（前書き）

こんにちは、作者の八重桜です。

新連載2つ目として投稿したこの作品ですが、SAOと比べると良い出来になってます。

SAO1800文字なのに、この作品は5000文字。

力の入り具合が違いますね（笑）。

ということで、この小説を楽しんで頂けたら嬉しいです

1話 転校生の噂

「稟くん、稟くん」

聞きなれた声が俺を読んでいる。

「稟くん、もう朝ですよ」

毎朝俺を起こしてくれる優しい声。

ぼんやりとした意識の中で今日もその声が聞こえたことをうれしく思う反面、布団の中にいることができる時間がもつないことに、少しさびしさを覚える。

「稟くん」

「ん……………」

睡魔を何とか払って、目を開けてみるとそこには、

「稟くん、おはようございます」

俺にやさしく微笑んでるいつも見慣れた幼馴染の顔があった。

「もう少し遅かったら、思いっきり布団をめくっちゃうところでした」

それはやめてほしい。生理的な意味でも、寒さの意味でも。

「あと3600秒・・・」

「それって1時間っていうんじゃないんでしょうか？」

「そうともいうな」

「別に寝かせてあげるのはいいですけど、せっかく桜ちゃんが作った朝ご飯が覚めちゃいますよ？」

せっかく、桜ちゃんがなめこ汁を作ってくれたんですけど・・・」

さすが楓。俺の弱点を突いてくるな。

「仕方ない。人間は睡眠欲も大切だが食欲も大切なんだ」

「それじゃあ、着替えおいておきますね」

そういうと、俺の着替え（綺麗に畳まれている）を置いて、楓は俺の部屋を出て行った。

今の美少女は芙蓉楓。簡単に言うなら同じ年の幼馴染。

俺の父親と楓の父親が仲が良かったこともあり、家族ぐるみでのつきあいをしていた。

そう、していたのだ。

なぜ過去形かというと、俺の両親はもうこの世にはいない。

交通事故で8年前に他界してしまったのだ。

あのころの俺は両親が死んでから泣いてばかりだった。

今、ここまで立ち直れたのは、確実に楓と桜のおかげだろう。

桜というのは俺と楓のもう一人の幼馴染で、本名八重桜。

俺や楓と同じバーベナ学園に通う高校2年生だ。

え？なんでその2人と俺と一緒に住んでるかって？

それは、俺の両親が死んだ後、俺は芙蓉家に引き取られたからだ。
いわゆる、居候。

だが、俺と楓が中学2年ころになると楓のお父さんの出張が多くなり、俺たち2人が大きくなったから大丈夫だろうということと一緒に楓のお母さんまでついて行ってしまったのである。

まあ、そんなことがあって、楓と2人暮らしたたわけなのだが、高校に入学してすぐ、楓一人では家事が大変だろうつとこのことで桜もこの家に住むことになったのだ。

桜の両親も「稟くんがいるなら安心ね」「かわいい子には旅をさせるものだ」と言ってたそうだ。

普通、男がいるところに自分の娘を住ませるか？

楓の母親も「いつになったら孫の顔が見れるのかしら」とか言ってたし。

まあ、こういう事情があって俺たち3人は一緒に住んでいるわけだ。

そして、本来なら居候の俺も家事をしなければならないのだが、以前手伝おうとしたら「私の1日の楽しみをとるんですか？」「稟くん、こういうのは女の子に任せて」と、見事に拒否されてしまった。

「稟くん、朝ご飯冷めちゃうから早く降りてきなよ」

「わかった今行く」

下に降りていくと、そこには朝ご飯を用意し終えたらしい楓と桜が俺を待っていた。

「楓、桜、おはよう」

「おはよう、稟くん」

「おはようございます、稟くん」

「さっきは気づかなかったけど、今週は楓の週なんだな」

「うん、先週は私の週だったからね」

何も知らない人は聞いてもなんのこっちゃとなるかもしれないが、簡単に言つと俺を起こしに来るのがどちらかということだ。

で、起こしに来ないほうは朝ご飯を作ってくれているというのだ。

この俺はどちらが起こしに来るかは週替わりらしい。

それで、今週は楓の週だから、俺を楓が起こしに来て、朝ご飯を桜が作ってくれたというわけである。

ついでに言つとくと、昼ごはん（弁当）は朝食を作った方、晩御飯は2人で作る事になってるらしい（楓談）。

「そういえば、稟くん知ってる？」

「何をだ？」

「私たちのクラスに何人が転校生が来るらしいよ」

「珍しいな。この時期に転校生なんて」

「麻弓ちゃん情報だから、多分間違っていないと思うよ」

「一体、麻弓ちゃんはどこからそんな情報を手に入れてくるんでしょう？」

「楓、気にしたら負けだ。」

あいつを理解するなんて俺たちには不可能だ」

「稟くん、それは言い過ぎじゃ・・・」

そんな会話をしながら、楽しい朝食の時間は過ぎて行った。

「そういえば、楓。今回のおじさんの出張は長いのか？海外だとか言ってたけど」

「今回は少し長くなるみたいですよ。3、4か月ぐらいかかりそうだったってましたから」

「いいのかねえ。自分の娘を若い男と一緒に住ませておいて」

「それだけ、稟くんのことを信用してるんですよ。」

それに、桜ちゃんもいますし」

「そんなもんかなあ？」

「それより、稟くん。いつもより少しだけ遅いから急ごうよ」

桜のその言葉をきっかけに俺たちは歩き出した。

すると、俺はあることに気付いた。

「もう、両隣と目の前の家にはだれか住んでるみたいだな」

完全和風構築の右隣。今どきの洋風建築の左隣。そして、うまく和と洋が合わさってできている目の前。

以前は普通の会社員の人たちが住んでいたのだが、最近になって周囲8件、左右合わせて12件が家ごとなくなってしまったのだ。

ある日学校から帰ってくるとそこは空き地になっていた。

翌日、学校から帰ってくると家が建っていた。

そして、左右と目の前にはドラマとかに出てきそうな豪邸が建っている。

まるで魔法のようだった。

「見たいですね。まだ、中の人にはあったことはありませんが、近いうちにご挨拶に伺いましょうか」

「まあ、いきなり来られても相手も困るだろうし、もう少し時間をおいてからな」

そう言っ、俺たちはまた歩き出した。

芙蓉家から学校までは徒歩でおよそ15分。ほかの学生たちと比べるとずいぶん恵まれた立地条件にある。

俺たちはその恵まれた通学路をいつもより早歩きで通り過ぎた。

そして、学園に近づくにつれて、徐々に学生たちの姿が増えてきた。

神族、魔族、人間が同じ制服を着て、登校してる光景はこの学園独特のものであろう。

俺たちの通っている学園の名は『国立 バーベナ学園』。

5年程前に作られた学園で、人間、魔族、親族と一緒に学ぶことを目的に作られた学園である。

!!!!。

その時だった。俺の背中に激痛が走った。

犯人はわかっていて。朝っぱらからこんなことする人は3界探してもこの人しかいないだろう。

「亜沙先輩、いつも言ってますけど、叩くのはやめてください」

「はろゝ、稟ちゃん」

「「亜沙先輩おはようございます」「」

幼馴染2人もこの光景を見慣れたのか、何も突っ込まず、先輩へとあいさつしていた。

「今日も3人で登校？本当に稟ちゃんは両手に花よね」

「で、今の攻撃は嫉妬ということですか？」

!!!!。

また、俺の背中に激痛が走った。

「稟ちゃん、女の子っていうのはデリケートなんだから、もっと言葉には気をつけなきゃダメよ。」

ということで、ボクは先行くから、あんまりいちゃいちゃしてると予鈴なっちゃうわよ」

そういうと、元気いっぱいの先輩は学園へと駆けて行った。

今の人は時雨亜沙。俺たち3人の中学からの先輩で、料理部の部長でもある。

「相変わらず元気だね、亜沙先輩は」

「元気すぎてこっちの身が持たないよ」

俺はまだ痛い背中をさすりながら、学園へと向かった。

「楓ちゃん、俺様の胸の中へようこそ」

教室に入った俺を出迎えたのは樹の熱い抱擁だった。

「残念、外れだ」

「稟、俺の無念の中へようこそ……」

正直気持ち悪いこと変わりないが、楓や桜に抱き着かせるよりまだましだった。

「毎朝抱き着かれるこっちの身にもなってくれよ」

「むしろ、君に毎朝抱き着かなきゃいけない俺様の身になってほしいね」

「よくいうな」

そんな俺たちのやり取りを楓と桜はクスクス笑いながら見ていた。

「樹くんおはようございます」

「緑葉くんおはよう」

「楓たちも毎朝こんなばかにあいさつしなくていいのに」

心底あきれたような顔をして一人の少女がやってきた。

「「麻弓ちゃん、おはよう」」

2人一緒に挨拶していた。この2人って昔から結構八モること多いんだよな。

「おっす」

俺も一応、楓と桜につられて挨拶しておく。

彼女の名は麻弓「タイム」。

樹と同じ、2年連続クラスメイト。

現在ではかなり珍しい人間と魔族のハーフだ。

桜の今朝の会話からわかるように、新聞部でもないのに噂や事件を追いつけている。

「麻弓、今日も胸が小さいね」

「余計なお世話よ。」

大体私みたいに胸が小さい子って貴重なんだから。

平均より小さいということはそれだけ数も少ないってことだし」

「ま、麻弓ちゃん・・・」

楓も苦笑いしている。

「とりあえず、転校生に緑葉くんは近づけないようにしたほうがいいわね」

「へえ……」

「そういえば、そんなこと、今朝桜ちゃんが言っていましたね」

「なんか詳しい情報がわかったのか？」

「あまり詳しいことはわからないけど、転校生は4人ですべて私たちのクラスに転入してくるらしいですよ。」

で、そのうち2人は明日から、あとの2人は明後日から転入してくるらしいですよ」

「よ、四人もですか？」

楓が疑問に思うのもしょうがない。まだ、2人とかならわかるが4人は多すぎるし、ほかのクラスに転入させてもいいはずだ。

「まあ、確かに変よねー」

「もしかして、4人ともこのクラスに好きな人がいて、無理を言つてこのクラスにしてもらったなんてことは……」

「そんな、マンガみたいなことなんてありえないって」

「そうそう、そんなどこかのご都合主義小説じゃあるまいし」

作者「ギクッ!!」

「……ですよねえ」

「よし、ホームルーム始めるぞ!」

話がひと段落ついたところで俺たちの担任である紅女史が入ってきた。

————授業中————

「よし、じゃあここまでだ」

午前中の長い授業が終わった。

「そうだ、つつちー。お前は幼馴染の弁当だし、学食戦争は関係ないよな。」

「ちょっと来い」

俺はその言葉につられて、廊下へと出た。

「何か問題でもありましたか？」

「まあ、大したことじゃないんだが、お前、子供のころに多民族の女の子やお金持ちのお嬢様と知りあったりしたか？」

「はい？」

「一応確認をとっておきたくてな」

「分かりませんね。子供のころなんてよく覚えてませんし、あのころは神族だ、魔族だっつて気にしていませんでしたから」

「まあ、しかたないな」

「それがどうかしたんですか？」

「まあ、とにかく頑張れ！！」

私も微力ながら応援するぞ」

そういつと紅女史は逃げるように去って行った。

取り残された俺は、

「一体何をがんばればいいんだ？」

状況がわからないままだった。

1話 転校生の噂（後書き）

年内にもう1回更新するかもしれません。というか、できたらいいな。

又、いつでも感想お待ちしております

2話 転校生2人は婚約者！？（前書き）

年内に更新できてよかった！

ということで、今回はあの2人の王女様が初登場です。

桜と楓が空気になりすぎてる気がするけど気にしない……。。

2話 転校生2人は婚約者!?

「麻弓ちゃんの話が本当なら、今日、転校生がやってくるんだよね？」

学園に続く道を歩いているときに、桜が訪ねて来た。

転校生といわれると、俺は昨日紅女史に言われたことをいまだ考えていた。

俺は過去に神族や魔族のことであつたことがあつただろうか？

確かに子供のころに、女の子を何回か助けたことはあつた。

でも、その助けた子が神族または魔族であるかどうかなんて気にしてすらいなかった。

「転校生か……」

「稟くん、どうかしたんですか？」

「昨日、紅女史に廊下呼び出されたときに意味深なことを言われてな……」

「意味深なこと?」

「なんか、俺が昔異種族の女の子にあったことがあるかって聞かれて、しまいには がんばれ って言ってたんだ」

「じゃあ、稟くんはその転校生にあったことがあるってこと?」

「それがよく覚えてないんだよ」

「それにしても転校生は今の話と状況からしてやはり神族や魔族の方なんだろうか?」

「たぶんな。4人全員じゃなくても少なくとも1人はそうだろうな。そうじゃなかったら、わざわざ紅女史も俺にあんなことたずねないだろうし」

そんなことを言っていると、俺は不意に一昨日であった2人の女の子のことを思い出した。

一昨日俺は、スーパーで神族の女の子と、その帰りに寄った公園で魔族の女の子と出会ったのだ。

そして、その2人は見たところ俺たちと同じくらいの年齢、そのう

え楓や桜にも引けを取らない美少女だった。

また、自己紹介した覚えもないのに2人は俺の名前を知っていた。

もしかすると、あの2人が転校生なのか？

「まさかな・・・」

転校生2人の正体がまさかであるのを知るのにそう時間はかからなかった。

そして、この時が平凡な日常の最後であったのかもしれない。

「うーっす」

「おはようございます」

「おはようっ」

いつも通りのあいさつをしながら入った教室は昨日までとは雰囲気
が違っていた。

「・・・・・・・・いつから女子校になったんだ？」

そう、いつもは机に突っ伏している男子が多いにもかかわらず、今
日は男子が1人もいないのだ。

まさしく、女の園だった。

「土見君は職員室の前を通ってこなかったの？」

俺たち3人の姿を見つけた麻弓がこちらに向かってきながら、そんな
ことを聞いてきた。

「わざわざ、職員室の前を通らないだろ。」

遠回りになるだけだし」

「まあ、正論ね・・・・。」

よかったわね2人とも！土見君が毒牙にかからないで」

「職員室で何かあったの？」

「あったというか・・・いたというべきか」

「もしかして、転校生の方ですか？」

「そうなのよ。」

それでね、その転校生が極上の美少女だったのよ。

改めて緑葉君の嗅覚を思い知らされたのですよ」

「ってことは、もしかして男子が1人も教室にいないのは・・・」

「男子はみんな、転校生を一目見ようと職員室へ行っちゃったのですよ」

「なるほどねえ。悲しい男のサガだな」

「ほほう、なかなか冷静で。やっぱり、超極上の美少女2人に面倒

を見てもらってる人は余裕ですか？」

「そのネタは言われ慣れてるから、今更面白い反応はしないぞ」

「いいわよね。こんなに一途に尽くしてくれる幼馴染が2人もいて」

「おーい、さつさと席につけー!!」

麻弓と話しているうちに男子も続々と教室に帰ってきていたようで、いつのまにか紅女史まで来ていた。

「それでは、・・・まあ今更説明する必要はないか。

2人とも入ってきなさい」

男子の間から大歓声が巻き起こった。

どこに用意していたのか、クラッカーまで鳴り響いた。

が、教室に入ってきたのは

「あっはははは！！！いやあ、なんか面白そうなところじゃねえか、人間界の学校もよお！！」

「うん、全くだ。若く美しいお嬢さん方がいっぱいいて若返ってしまいうそだね」

2人のおじさんだった。

1人は和服に身を包んではいるが、それがまったくあっていない筋肉質の大男。加えて言うなら神族。

もう1人は一昨日樹と出かけていた時に出会った魔族の人だった。

「なあ、樹。極上の美少女じゃなかったのか？」

「そんなわけがないって」

樹は全力で首を振っていた。

そして、後ろの席の麻弓のほうを見ると、

「ぶんぶんぶん！ー違う違う違う違う！ー！」

麻弓も全力で首を振っていた。

2人とも否定したのでおそらくこの2人は転校生とは無関係なんだろう。

俺は正直ホっとした。

つとそのときだった。

「おっ、発見発見」

いきなりこっちを向いた魔族の男性と目があった。

「どれどれ……、おっ、あいつか。なかなかの面構えじゃねえか」

今度は神族の男性と目があった。

そして、その2人は何を思ったのか俺のほうへ歩いてきた。

「やあ、稟ちゃん。一昨日はすまなかったねえ。

でも、おかげで君という人間がなんとなくわかったよ。

君は実に誠実なようだ。やっぱり男は誠実でなければいけないからね。

一人の女性を一途に思い続ける誠実さ、これが一番大事だ」

いや、あなたが言うべきセリフじゃないでしょ。

「ネリネちゃんのこと、よろしくたのんだよ」

魔族の男性はそんな俺の気持ちにちっとも気づいていなかった。

つというかネリネって？

「おいおいおい、抜け駆け話だぜ、まー坊。

それにな、男に一番大切なのは力だぜ。いざという時に女を守る力、その力こそがかっこよさだぜ」

こっちは人を見かけどおり豪快な人のようであった。

「まあ、見たところなかなかの体つきのようだしな。シアのころしく頼むぜ、稟殿よお」

だから、シアって誰？

つというか、一体何が起こってるんだ？

「お父さん！！！」

いきなり、目の前から鈍い音が聞こえた。それは、まるで人の頭を殴ったような・・・。

「シア、いつも椅子はやりすぎだと教えただろうが・・・」

頭を椅子で殴られたらしいその男の後ろから、同じく神族らしき女の子が1人姿を見せた。

「あ……」

その子は俺が一昨日スーパー出会った神族の女の子であった。

「お父様もやりすぎです。稟様が驚いていらっしゃるじゃないですか」

そしてもう一人、魔族の男性の後ろから小柄な女の子が姿を見せた。

そして、その子は一昨日公園で出会った魔族の子に間違いはなかった。

「いや、驚かせるつもりはなかったんだけどね、やっぱり挨拶くらいはしておきたいじゃないか」

「ですから、今日の夜にでも挨拶に伺うという話になっていたじゃないですか」

「いやあ、神ちゃんと話したら、お世話になるみなさんにも挨拶しておいたほうがいいっていう話になって」

「おい、まー坊。お前だって乗り気だっただろうが」

「けれど私は止めたじゃないか」

「てめ、きたねーぞ。嬉々としてついてきたくせに」

「「2人とも同罪です」」

「「はい」」

2人の女の子に叱られて、2人の男性は今までの勢いが嘘のようにシユンとなった。

「それで、もう話を進めてよろしいですか」

そして、追い打ちをかけるように、紅女史の怒りがこもった声が発せられた。

「「「はい」」」

ホームルームが始まってから15分後、ようやく転校生の紹介が始まった。

「リシアンサスです。神界からやってきました。

ちょっと長い名前だと思うので、シアって呼んでください」

「あの、ネリネと申します。魔界からやってまいりました。

よろしければ、リンと呼んでください」

「ユーストマだ。シアの父親やってるんでよろしくな。

神王もやっているが、それはついでに覚えておいてくれ」

「私はフォーベシィ。ネリネちゃんのパパでもあり、魔王でもある。

見知っておいてくれたまえ」

「お2人は結構です」

また、紅女史の後ろから黒いオーラが出ていた。

って、今あの2人、なんかものすごいこと言わなかったか？

「お、おい麻弓。今あの2人……」

その言葉を遮るように聞こえたのは意外にも楓の声だった。

「あの、撫子先生。今とても信じられない言葉を聞いた気がするんですけど……」

神王と魔王っていうのは？」

紅女史はその質問が来るのを分かっていたようだった。

「えー……、まあ……そういうことだ。」

非常に信じられないことではあるが、この2人は神界と魔界の王の立場にあるお方だ。そして、転校生はその娘さん。

言いたいことはわかるな？緑葉？」

「もちろん大丈夫ですよ、俺様が必ず幸せにしますから」

「お前は近づくなと言っているんだ」

ああ……また紅女史の後ろに黒いオーラが……。

「あの、神王の娘だとかは気にしないでくださいね。

気にされてお姫様扱いされるほうが嫌なので」

「私も同じです。みなさんとは普通のお友達として付き合っていただけだと思っているので」

「分かったな、緑葉」

「当然ですね。どんな熱い恋愛もまずは友達からですよ」

「で、だ……」

紅女史はもうあきらめたくしく緑葉の言葉を見殺していた。

「つつちー」

「はい？」

いきなり俺に話が飛んでくるとは思わなかった。

「この2人の面倒はお前に任せる」

「……………は？」

クラス中の男子の視線が俺に集まる。

「超法規的処置によってそう決まった……」

「超法規的？」

「うん、それについては私から説明しようじゃないか」

魔王様が一步前に出てきた。

「つまり、稟ちゃんはシアちゃんとネリネちゃん婚約者候補に選ばれたわけなんだよ」

「はあ!？」

魔王様は、ものすごいことをあっさりと言ったのけた。

俺のもとに集まっていた視線の半分、つまり男子からの視線がいつの間にか殺意を含んだものへと変わっていた。

「はつきり言ってしまうえば、神界と魔界の次期王候補ってわけだ。どっちがほしいんだ？」

「うちのシアを選んでくれれば神界の権力使い放題だぜ」

「それなら、ネリネちゃんを選んでくれれば、魔界の権力使い放題なんだからね」

「ちょっと待ってください。なんで俺が2人の婚約者候補なんですか？」

「まだ、幼いころのことだからねえ。覚えていろうというほうが難しいか。」

君たちは子供のころに出会っているのだよ」

「お父様、そのことは・・・」

「あとは本人たちから聞くなり、思い出すなりしてみてくださいませ。」

それでは、ネリネちゃんとシアちゃんのことよろしく頼むよ、稟ちゃん」

「よろしく頼むぜ」

かくして、2人の王様は教室から出て行った。

台風のような大きな被害を残して。

「楓ちゃん、しっかり。座ったまま気絶しちゃ駄目だよ」

声につられて、楓のほうを見てみると、座ったまま気絶しているらしい楓を桜が起こしていた。

これが波乱万丈の日々の導入に過ぎないとは、稟には知る由もなかった。

続く・・・

2話 転校生2人は婚約者！？（後書き）

デイスさん、ムギユウさん、感想ありがとうございました。

感想のおかげで年内に更新できたといっても過言ではありません。

これからもよろしければ感想をくださるとうれしいです。

さてさて、それは置いといてついに全ルート終わりましたよ、世界征服彼女！！

世界征服彼女とは今月24日にnaveelから発売されたゲーム。

24日にはほかにものーぶるわーくすやD・CDXも買ったんですがそちらも終わりました。

ということで、これからはネタとしてどんどん使っていく予定です。

あと、私はコミケ2日目に参加してきます。なので、多分もう年内

に更新することはできません。

ですから、ここで言わせていただきます。

みなさん、よいお年を！……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6796p/>

SHUFFLE！～if story～

2011年1月4日00時56分発行